目　次

はじめに……9
第一章　「文」「文章」「文体」の概念と最近の研究動向……17
1　文・文章・文章論・文体・文体論・スタイルに関する辞書的説明……17
2　『国語年鑑』の分類より……24
3　最近の研究動向……37
【発展課題】……46
【参考文献】……47
第二章　「文体」を研究するための心構えと方法論……49
＊木原茂「文体論の方法――部屋描写の場合――」（全文収録）に学ぶ
1　木原茂「文体論の方法――部屋描写の場合――」に学ぶ……49
2　《収録》木原茂「文体論の方法――部屋描写の場合――」……49
《一　文体論の問題》……50

《二　二葉亭四迷の部屋描写》……54
《三　国木田独歩の部屋描写》……56
《四　尾崎紅葉の部屋描写》……58
《五　島崎藤村の部屋描写》……60
《六　森鷗外の部屋描写》……62
《七　夏目漱石の部屋描写》……65
《八　芥川龍之介の部屋描写》……68
《九　むすび》……72
3　木原論文より発展して……75
【発展課題】……78
【参考文献】……79
第三章　「文体」を計量的に分析し帰納する方法論……80
＊樺島忠夫・寿岳章子「文体の統計的観察」（全文収録）に学ぶ
1　樺島忠夫・寿岳章子「文体の統計的観察」に学ぶ……80
2　《収録》樺島忠夫・寿岳章子「文体の統計的観察」……80

《1　作品の統計的分析》……81
(1)　名詞の比率（%）……82
(2)　MVR……82
(3)　指示詞の比率（%）……83
(4)　字音語の比率（%）……84
(5)　文の長さ（自立語数）……84
(6)　引用文の比率（%）……85
(7)　接続詞をもつ文の比率（%）……85
(8)　現在どめの文の比率（%）……85
(9)　色彩語の比率（‰）……86
(10)　表情語の比率（‰）……87
《2　作家の文体の把握》……96
《付表A　現代小説100作品の分析表》……104
《付表B　作家の作品特性値分析表》……108
3　樺島・寿岳論文より発展して……109
【発展課題】……110

【参考文献】……111
第四章　「文章」「文体」研究と共鳴する「文章史」「文体史」……112
1　ある講座本より……112
2　他の講座類より……119
3　知識としての「文体史」と術語……121
【発展課題】……122
【参考文献】……123
第五章　中世における「文章」「文体」研究の実態……124
＊中世の文章群を読む
1　文章研究・文体研究の歴史……124
2　中世における文章研究・文体研究……125
3　ロドリゲス『日本大文典』に言うBunxŏ（文章）・Vtais（謡）・Sŏxis（草子）・Monogataris（物語）・Mais（舞）の具体例……134
3・1　Bunxŏ（文章）――蓮如「御文章」……135
3・2　Vtais（謡）――元和卯月本謡曲百番「定家」……136

3・3　Sŏxis（草子）――『うらしま』……139
3・4　Monogataris（物語）――『太平記』直冬西国下向事／『撰集抄』増賀上人之事……143
3・5　Mais（舞）――幸若舞曲「山中常盤」……146
【発展課題】……150
【参考文献】……151
第六章　異文化接触の上に花開いた「キリシタン文学」の文体……153
＊多くのキリシタン文献を読む
1　異文化接触の上に花開いた「キリシタン文学」とは……153
1・1『サントスの御作業』……155
1・2『ヒイデスの導師』……172
1・3『コンテムツスームンジ』と『ぎやーどーぺかどる』……176
2　ゾ終止文から見た「キリシタン文学」の文体……180
2・1「キリシタン文学」の「ゾ終止文」の様相……180
2・2「ゾ終止文」の様相に関する〈表1〉から導かれること……182

2・3「ゾ終止文」の上接語より導かれること……185
【発展課題】……189
【参考文献】……190
第七章　ある日の「新聞」の「文体」分析……193
1　一九九九年八月一日の新聞の社説から……193
2　川柳・俳句・短歌の文末表現と文体……195
3　文末表現の歴史と言文一致運動……197
【発展課題】……199
【参考文献】……200
第八章　小学一年生の「文章」分析……202
1　文字と文章の獲得……202
2　小学一年生の「文章」を文連接法から観る……203
3　小学一年生の「重ね型文連接」の様相……205
4　「重ね型文連接」における前文・後文間の表現機能……216

5　まとめ……223
【発展課題】……225
【参考文献】……226
第九章　どうしたらよい文章を書くことができるのか　実践的文章論Ⅰ……227
1　章のはじめに……227
2　風に靡くもの……228
3　松葉にさわろう……230
4　見えないものを見る、連想の世界……234
5　原稿用紙に向かおう——段落・改行・句読点のことなど……236
【発展課題】……242
【参考文献】……243
第十章　どうしたらよい文章を書くことができるのか　実践的文章論Ⅱ……244
1　章のはじめに……244
2　「あと」……244

3　「とか」「私的には」……246
4　「いまいち」「なにげに」……247
5　「けど」「とこ」「～って」……250
6　カタカナ語……251
7　子どもの文章……253
【発展課題】……256
【参考文献】……257
おわりに……258
あとがき……261

はじめに

平成十年（一九九八）十一月に刊行された『ことばの歴史学――源氏物語から現代若者ことばまで』（丸善ライブラリー）において、私は、

古代から現代へと、滔々と流れる〝ことばの大河〟を、「中世ことば」を舵とりに下りながら、岸々に展開する人々の生活をながめてゆく。

という基本姿勢をとり、その「はじめに」には、

本書は、日本語の歴史を〝語った〟ものである。日々新たなる学会の重厚で多彩な成果を紹介するよりも、〝言語生活史〟という観点で、学生に日本語について話す機会の多い私の実践的〝お話〟を文章化したものといってよい。

日本語の歴史を語るにあたって、私のなじみのある中世（院政期～鎌倉時代～室町時代～江戸初期）のことばをきっかけにしていることの多いのはそのためであり、逆に言うと、そのスタンスでなければ、私は、滔々たる日本語の歴史の流れに乗ることができない。

中世語は、私にとって、なれしたしんだ筏なのである。

室町後期にできた流行歌集『閑吟集』に、

〝吉野川の花筏浮かれて漕がれ候よの　〳〵〟

という小歌があるが、まさに、中世のことばに、「あらおもしろの……」と浮かれ焦がれて〝語る〟のである。

と記した。そして、同書における「髪をこそ形見にはすれ――院政期の会話文」という章で『今昔物語集』を主

	書名	用字	用語	刊行年	刊行地	所在
1	サントスの御作業	ローマ字	日本語	一五九一	加津佐	オックスフォード大学ボドレアン図書館
2	ヒイデスの導師	ローマ字	日本語	一五九二	天草	ライデン大学
3	どちりいな-きりしたん	ひらがな・漢字	日本語	?	?	バチカン図書館
4	ドチリイナ-キリシタン	ローマ字	日本語	一五九二	天草	東洋文庫
5	病者を扶くる心得	ひらがな・漢字	日本語	?	?	天理図書館
6	ヘイケ物語	ローマ字	日本語	一五九二	天草	大英図書館
7	エソポ物語	ローマ字	日本語	一五九三	天草	大英図書館
8	金句集	ローマ字	日本語	一五九三	天草	大英図書館
9	コンテムツス-ムンヂ	ローマ字	日本語	一五九六	?	オックスフォード大学ボドレアン図書館
10	心霊修行	ローマ字	ラテン語	一五九六	天草	オッペルスドルフ家
11	精神生活綱要	ローマ字	ラテン語	一五九六	?	天理図書館他
12	サルワトル-ムンヂ	ひらがな・漢字	日本語	一五九八	?	カサナテ図書館
13	ぎや-ど-ぺかどる	ひらがな・漢字	日本語	一五九九	?	大英図書館他
14	ドチリナ-キリシタン	ローマ字	日本語	一六〇〇	?	彰考館
15	どちりな-きりしたん	ひらがな・漢字	日本語	一六〇〇	長崎	カサナテ図書館
16	おらしよの翻訳	ひらがな・漢字	ラテン語・日本語	一六〇〇	長崎	天理図書館
17	和漢朗詠集巻之上	ひらがな・漢字	日本語・漢文	一六〇〇	?	サンロレンソ文庫
18	サカラメンタ提要	ローマ字	ラテン語	一六〇五	長崎	北堂文庫他
19	スピリツアル修行	ローマ字	日本語	一六〇七	長崎	大浦天主堂他
20	こんてむつす-むん地	ひらがな・漢字	日本語	一六一〇	京都	天理図書館
21	太平記抜書	ひらがな・漢字	日本語	?	?	天理図書館

1・1『サントスの御作業』

①貴きコンヘソウレス　サン・バルランと、サン・ジョサハツの御作業、

これサン・ジョアン　ダマッセの記録に見えたり。

諸国に御教へ栄へ給ひ、数々のエケレジヤを建て、又は世を捨つる山居の道心者歴々ありし時代、インデイアの国にアエニルと申す帝富貴栄耀世に勝れ、殊更御形人に越え給ひしかば、現世のことのみ楽しみ給ふといへども、御位を譲り給ふべき王子御一人もましまさねば、これのみ深く歎かせ給ふなり。されば、かの帝ゼンチヨにてまします故に、よこしまの本尊に対し給ひて御信心浅からず、キリシタンの御教へを深く嫌ひ給ふなり。されども山居の善人達はその御怒りをも恐れ給はず、ゼズキリシトの御奉公として、マルチルの望みを起こし、世に顕はれてゼズスの御名を唱へ、人に／も勧め、この世のあだなることと、後の世の長き楽しみを願ふべきことをのみ弘め給ひしかば、人々これを慕ひ、発心者の多かりしそのうちに帝王の臣下に富貴栄耀にして、堪能人にすぐれ、世の誉れかくれなかりし人ありけるが、帝王キリシタンをここかしこにてあるいは打ち果たし、あるいは追ひ失ひ給ふを見て、いよいよ世を厭はる心浅からず、殿上の交はり、爵録にも心をとどめず、年来住みなれ給ひし館を捨て、人倫遠き山の奥にこもり居給ひて、身をやつし、アニマをみがかるる。ひとへにデウスの御事をのみ勤め行なひ申されしなり。日頃叡慮に叶はれし臣下なる故に、帝御歎き深ければ、これにつきてもキリシタンに対せられ帝王の御逆鱗はなはだしく、いそぎ諸方へ勅使を立て、いかなる野の末、山の奥、谷の底までも残らず尋ね出し、召し具して参れとの宣旨しきりなるをもつて、即時に尋ね出し、参内申されたるなり。されば、この大臣世にありし時は金銀をちりばめ、珠玉をつらねたる装束を着し、数々のとも／がらに囲繞渇仰せられし人なりしが、今はひきかへて顔色黒み、形衰へ、身には褸褐をまとひ、かちはだしにて内裏にまゐり、庭上にたたずまれけるを帝